

# 南溪の行信論研究

## ——巖牛事件を中心として——

伊 藤 雅 玄

### はじめに

親鸞<sup>(1)</sup>の名著、『顕浄土真実教行証文類』における行と信との関係は、「行信論」と呼ばれ、往生証果の因法に対する研究として、江戸時代から現代に至るまで、様々な観点より議論がなされている。真宗行信論に関しては、既に普賢大円による詳細な研究書があるが、ここでは学僧の教学的特色が中心に論じられており、各々が学説を立てるに至った思想背景について検討するという手法は取られていない。本論では、筑前学派の南溪に焦点を当て、特に「巖牛事件」における影響を考察する。それによって、行信論の中心的な問題の一つを明らかにするとともに、南溪の行信論成立の思想背景を探る一助としたい。

### 研究方法

本論では、以下の手順で、「巖牛事件」が南溪の行信論へ与

えた影響の有無を明らかにする。

- 一 「巖牛事件」における、行信論上の論点を明確にする。
- 二 「巖牛事件」前後の南溪著作より、同一の論点を議論する箇所を見つけ、変化・影響の有無を検討する。

「巖牛事件」の内容や、その前後の出来事に関しては、南溪の自伝である『淮水行実』<sup>(2)</sup>が詳しい。それによると、巖牛の浄土宗鎮西派への改宗が発覚するのが、一八三〇年の六月で<sup>(3)</sup>あることが分かる。改宗に関して、巖牛は、浄土真宗への疑義を『疑難真宗義』にまとめて南溪に提出し、南溪がそれに答える形で、『暁諭抉膜弁』を著して説得を行った。この書及び再三の説得により、巖牛は真宗に帰属することとなる。<sup>(4)</sup>以上より、一の手順では、『疑難真宗義』および『暁諭抉膜弁』を参照すれば良いことが分かる。

続いて二の手順についてであるが、「巖牛事件」以前の著作としては、一八二九年の『爐上閑談』<sup>(5)</sup>、以後としては一八四九年の『行信一念贅語』<sup>(6)</sup>が挙げられる。

## 「巖牛事件」における、行信論上の論点

本節では、手順一を行う。巖牛『疑難真宗義』は、五つの論点に対して真宗への疑難を展開しており、それに対応する形で、南溪の『暁諭抉膜篇』<sup>(7)</sup>も五章構造となっている。「行信論」に関連する箇所は、両書共に第二章であり、特に重要な箇所を以下に示した。

## 巖牛『疑難真宗義』

元祖上人浄土の一門を開て、口称念仏の一行にて、具縛の凡夫実報高妙の土に往生することを教ゆ。(中略)意業にて往生を決すること、元祖の意にそむけり。(中略)大谷の所伝は、三心章の「涅槃の城、以信為能入。」是唯信にて浄土に生るる義を証すれども、これ亦われうけかはす。(中略)これ念仏者の用心なり。浄土を願ふもの、三心を具せずんばあらずと云ことを示し玉ふ。三心を具すとも、念仏せざるは往生しがたし。

(『真宗全書』五九、二四六頁上～二四九頁上)

## 南溪『暁諭抉膜篇』

高祖云、「信を離れたる行もなし、行の一念を離れたる信の一念もなし。」之を尅論的示して、唯信を奪て正因を談ず。熟思して旨を得よ。(中略)願行具足所作尅成は、敢て争ふ所に非ず。然に其因を談ずるに、尅体あり義説あり。義を以て説くときは、片輪隻翼は涅槃の運に非ず。(中略)其不離中、尅して論ぜば、何ものか正因

なりや。若俱に得たりとせば、尅体の論に非ず。(中略)尅体して論定せば、此中随一に取れ。其信を取ると云はば、吾所立の中に墮せり。何の由ありて我を難ずるや。若行を取ると云はば、丐人の称名も正因を成ずるや。(中略)此中奪体尅論するとき、唯信是正因なることを得る。用与の義説と奪体の尅示とを詳にせよ。

(『真宗全書』五九、二七三頁上～二七四頁上)

巖牛が批判の対象とするのは、法然の「念仏往生」に対する親鸞の「唯信正因」の義である。論点はこの一つで、切り口はいくつか認められたが、的を射ていたのは先に挙げた内容のみである。これについて南溪は、用与の義説(願行具足)行信不離の立場)と奪体の尅示(因体的示)唯信正因の立場)との二門に分けて会通を行っている。

## 「巖牛事件」前後の南溪著作との比較

本節では、手順二を行う。『爐上閑談』は四章構造、『行信一念贅語』は三章構造である。「巖牛事件」の論点と同一の真宗批判に対して答える箇所は、『爐上閑談』「元祖高祖の化風に於て或は左右するの論」、『行信一念贅語』「弁明両一念旨」である。紙数の制限より、引用ではなく要約とし、註で該当箇所を示した。

『爐上閑談』<sup>(8)</sup>

○七祖の宗義は、從仏向生の願力回向門と、從生向仏の順彼

仏願門とに分けることができる。前者のみでは凡愚の出離を欠き、後者のみでは自力に墮す。

○竜樹と善導は、順彼仏願門。天親と曇鸞は、願力回向門。行から説くのは、順彼仏願の『観経』の法門で、廃立教相のため。信から説くのは、願力回向の『大経』の法門で、自督安心のためである。

○二門相成こそが真宗の大法であり、三経七祖と親鸞の宗義である。そうでありながら、二門に対する力点が異なるのは、それぞれの状況があり、所依の經典も一つではないからである。

○法然も二門を具すが、聖道の諸教に対したため、順彼仏願を主として説いた。

○相承の宗義は「廃立の教相」と「示の安心」とであり、法然と親鸞の義の間に全く差はない。

『行信一念贅語』

○善導の「三心既具無二行不成」、法然の「念仏行者必可具三三心」より、本願の行と信とは不離である。

○善導の「已弁三定三心一以為正因」と「若少一心一即不得生」、法然の「涅槃之城以信為能入」と「念仏すれども、往生するものきはめてまれなれば、三心を具せざるがゆへなり」より、往生の正因は信である。

○善導・法然が信一念を立てなかったのは、既に行信不離を

言ったところで明らかだったからである。一方で親鸞は、因体を示し業成を指定するために、成就の一念を異訳に照らして信一念往生の義を立てた。

○親鸞が、信に遍数がないにもかかわらず一念を論じるのは、未聞未信の前と後々相続の時に對して、初聞開發の時があるからである。これは順彼仏願の実を得た最初の一念であり、善導・法然の義を顕明するものである。

「念仏往生」と「唯信正因」の会通に関して、二門に分けて論じる点は、『爐上閑談』『暁諭抉膜篇』『行信一念贅語』の流<sup>10</sup>れで、大きな変化はない。しかしながら、『爐上閑談』では、竜樹・天親・曇鸞・善導の四祖を挙げて法然・親鸞間の会通を行っているのに対し、『行信一念贅語』においては、善導・法然と親鸞の会通という形を取っている。これは、真宗の立場での会通と、鎮西の立場での会通の違いと考えられる。真宗の立場に立ち、真宗の七祖を用いて会通を行っても、鎮西の立場からすると会通になっていないという批判が成り立つ。そのため、鎮西の立場に立ち、特に善導・法然の正当な流れを汲むものとして、親鸞を位置付ける必要があったものと考えられる。そのため、化風に對しても『爐上閑談』では「毫差あることなし」(『爐上閑談』五二丁左)という言い方であり、『暁諭抉膜篇』でもその域を出ないものであったのに対して、『行信一念贅語』では、「高祖の信一、二祖を顕明する」(真宗

## 南溪の行信論研究(伊藤)

全書』五二、五一(頁上)と、語気を強めるとともに、親鸞こそが法然の義を正統に受け継ぐものという、他派(特に鎮西)を意識した言い方となっている。こういった論調の変化に関して、『暁諭抉膜篇』から『行信一念贅語』までに十九年の歳月が開いていることからすれば、他の要因も考えられるが、少なくとも『爐上閑談』では見られなかった鎮西の立場からの会通が、『行信一念贅語』に見られることになった原因は、「厳牛事件」にあると見てよいように思う。

## おわりに

以上、本論では「厳牛事件」における影響を考察し、南溪の行信論成立の思想背景の一端を探った。「厳牛事件」においては、行信論の詳細ではなく、法然の「念仏往生」と親鸞の「唯信正因」といった化風の違いが問題とされた。そのため、その前後の著作である『爐上閑談』や『行信一念贅語』においても、化風に関する箇所を中心に論じるに留まり、厳牛事件が「南溪師の行信論」に与えた影響を言及するまでには至らなかった。本論で導かれた、「厳牛事件」前後で、南溪の法然「念仏往生」と親鸞「唯信正因」を会通する姿勢・力点に変化が見られる」という結論は、そのまま行信論にも影響を与えているが、詳細は、次稿に譲ることとする。

- 1 本文中の人名は、全て尊称略とする。
- 2 龍谷大学大宮図書館蔵、一八六八年出版のものを使用。
- 3 南溪『淮水行実』一二丁左〜一三丁左。
- 4 南溪『淮水行実』一五丁左。
- 5 南溪『淮水行実』一二丁右。
- 6 本来であれば一八三二年の『行信弁悞没』(『淮水行実』一六丁左)を参照するのが望ましいと考えられるが、こちらは現存しておらず、内容も含め確認することができないため、一八四九年の『行信一念贅語』(『淮水行実』四一丁左)とした。
- 7 『淮水行実』では『暁諭抉膜弁』であるが、参照した『真宗全書』五九では、『暁諭抉膜篇』となっている。
- 8 それぞれ、南溪『爐上閑談』(龍谷大学大宮図書館蔵、出版年不明)四八丁右、四八丁左〜五〇丁右、五一丁左、五二丁右〜五二丁左、五二丁左の内容を要約。
- 9 それぞれ、南溪『行信一念贅語』(『真宗全書』五二)五一〇頁上、五一〇頁上、五一頁上、五一頁上の内容を要約。
- 10 本論文での引用箇所には、二門が明言されていないが、別所(『真宗全書』五二、五二頁下)に「相承の一多の説に、蓋し二門あり。一には行々一多の義、二には信行一多の義。」とある。

## 〈参考文献〉

普賢大円『真宗行信論の組織的研究』(興教書院、一九三五)

〈キーワード〉 行信論、南溪、厳牛事件

(龍谷大学大学院)